

『抱朴子』外篇における隱者贊美の意味

下 見 隆 雄

『抱朴子』外篇において、葛洪は逸民的存在者を理想的な人間像として贊美していることを既に述べ、また

た彼がこのような人間存在を賞揚する心理の根底には、

一 彼自身が生きた晋代の政權は、彼の生国である呉国の敗北の上に成立したものであったし、またそれまでの文化の中心はあくまで中原であったこと、従って彼が呉人であることのために抱いた心理的屈辱・劣等感
は、彼に反社会的思想を持たしめ、そのような態度を取らせるに十分な理由になったであらうこと。

二、晋代の高位高官にあった者またこれと関連した者で、平穩な生涯をおえることのできた者は少なかったこと。従って世俗的物質的価値を追及する人間はそれだけ多くの危険に身をさらすことになるゆえ、そのような環境で自らを安全に保つ手段として、逸民的な在り方というものは最上の方策であったのではないか。

① というような理由が存したであらうことを明らかにした。

しかし、葛洪が逸民を賞揚する根拠については、これだけでは十分説明しきれないものがのこるし、視角を少しく変えてみると、その他の理由が存することも明らかになる。本稿ではこれについて考えてみたい。

(一)

葛洪の論ずる逸民を、ただ単に、常に社会集団に背向く存在者という面からのみ見る場合、その根拠としては前掲のようなものを考え得るのであるが、この面からでは、『抱朴子』外篇の中には、了解できないような文表現が多数見受けられる。そこで視角を変えて、これと逆の方面からの見方、即ち、逸民を社会に背向かぬ存在者、さらに云えば、高次の社会集団に帰属する意志を持って

いる、あるいはかつて持ったまた持ち得る存在者という
ような、もすこし広い立場で見ることではできないか、ま
た見るとどうなるかを考えてみた、以下少しく、前述の
二つの理由からのみ見る場合の、他の表現内容と矛盾す
る点・問題点を指摘してみる。

葛洪が逸民をどのような存在と把握しているかについ
ては既に述べたので、再び詳説することはしないが、問
題提起に必要なので、一・二例をあげてみる。

葛洪は、嘉遁篇に云うように、

薄周流之棲遑、悲吐握之良苦、讓膏壤於陸海、爰躬耕

乎斥鹵、

のような、社会的・政治的な環境から積極的に離脱し、
あらゆる物質的な恩恵の与えられる条件をすすんで放棄
する懷氷先生の在り方を是とし、安貧篇では、

言高行方、獨立不羣、時人憚焉、莫之或與、

のように、人間関係を断絶して、孤立して在る優秀なる
資質の持主楽天先生を正しいとするのである。さてそこ
で、葛洪が、この様な存在の仕方こそは、時間・空間を
越えて絶対的に妥当な在り方だという考えに立っている

のだとすると、これに関連して、人間関係や社会機構そ
のものの根本的な破壊を説き、又集団として在る人間存在
の無意味さを強調し徹底的に批判しなければなるまい。
ところが、葛洪は、このような逸民を賞賛しつつも、一
方では理想の社会についての構想を持ち、

夫君天也父也、君而可廢則天亦可改、父亦可易也、

(良規)

清玄剖而上浮、濁黄判而下沈、尊卑等威、於是乎著
往聖取諸兩儀、而君臣之道立、設官分職、而雍熙之化
隆、(君道)

蓋聞、冲昧既闢、隆濁升清、穹隆仰燾、旁泊俯停、乾
坤定位、上下以形、遠取諸物、則天尊地卑、以著人倫
之體、近取諸身、則元首股肱、以表君臣之序、降殺之
軌有自來矣、(詰鮑)

の如く、天地自然の存在が人間存在に先行するものであ
って、その中に人間存在の真理が存するという伝統的な
立場から、君・臣という階級を認め、上下尊卑の差ある
を当然とし、これらを構成員とする社会が宇宙自然の理
法を完全に反映している機構であるが故に、理想的にし

て絶対的な社会であると断じている。このように、君臣の關係が身分の上下を設定する階級制度として正しく調和を保つ所に理想的な人間社会が形成されると考えていることは、既に鮑敬言との思想的対立の説明をとうして明らかにしたところである。^②このように葛洪の思想をたどってくるとき、逸民的存在を是として賞める葛洪の考え方の中に、鮑敬言が説く無君社会の論と対立するもののあることは、そもそも一種の論理的矛盾を露呈することになりはしないかとさえ思われるほどである。しかるになお葛洪がはつきりと君臣体制を認め主張する事実をいかに考えるべきであろうか、このことは更に次のことを考慮に加えて取りあげねばなるまい。葛洪は新興の東晋の王室に対して、可成り前むきの姿勢で賞賛しており、それは

中興在今、七耀遵度、舊邦惟新、(勸學)

今聖明在上、稽古濟物、(崇教)

今普天一統、九垓同風、王制政令、誠宜齊一、(審舉)

今太平已近四十年矣、(審舉)

今天下向平、中興有徵、何可不共改既往之失、脩濟濟

之美乎、(刺驕)

晋王應天順人、撥亂反正、結皇綱於垂絶、修宗廟之廢

祀云々、(自叙)

などの表現に見られるものである。これは君臣体制を認める葛洪の立場から容易にたどり得る考え方である。かく見てくるとき、逸民的存在を是とすること、君臣体制を是とすることまた更に現実の王室に対する以上のような贅辞を用いる葛洪の考え方等には、矛盾なしとする立場から、これらがいかなる論理的関連のもとに統一され得るのかを説明してみる必要があるであろう。そしてこの場合、はじめに述べた如く、葛洪の逸民が永久に反社会的な存在をする者であるという観点からのみすれば、以上述べたように、葛洪の考え方は矛盾としてしか理解できないことになるのであるから、葛洪の逸民は、必ずしもいつでも反社会的存在の仕方を墨守するのではなく、ある意味では、大いに社会に帰属する意志も持ち得る存在者として観るとすればどうなるかということを問題にする段階に至るのである。そしてこれは、換言すれば、葛洪の逸民賛美はただ単にそういう存在者を賞める

ということだけでなく、それには、ある程度意図的な意味が込められていたのだという見方からのアプローチでもある。

以下先ず葛洪が外篇の各所で、東晋新王室への贊美をなすことの根拠を明らかにすることから論をはじめ。

(一)

外篇末の自叙によれば、葛洪が『抱朴子』を略完成させたのは、三十五・六才の頃と推定され、この頃、二十才頃から書きためて来た草稿をまとめ、大改定を加えて仕上げたものと思われる。それは丁度東晋王朝初の建武(A. D. 317)の頃であって、歴史の流れからすれば、西晋暗愚の主である恵帝を中心にくすぶり続けていた王室の内乱・政治の不安定が八王の乱においてついに燃えあがって、西晋王朝の滅亡を早めてゆき、やがてその機に乗じた北方胡族が洛陽、次いで長安をおとしたことで西晋王朝は滅び、既に中原の難をのがれていた司馬睿が、琅邪の名族王氏や江南の名族紀氏・顧氏らの支持を受け、東晋の王室が南方に成立する頃のことである。長い

間中原の文化に対しては常にある種の劣等感すら抱き、憧れの氣持を持って来た江南の人間にとって、国家の中心が南に移動するということは非常なよろこびであったし、さきの西晋王朝の下にあっては、呉人ということでも屈辱的な在り方もする一方、それだけに陸氏の活躍は江南人の大きな精神的支えでもあったのに、陸氏が難に遭って、北方に対する希望をなくしていた時期でもあるので、新王朝建設にあたって、土着豪族の力のあざかるどころ大なるものがあつたことは大いによろこぶべきことであつたらう。しかしその反面、新王朝と江南の地が北方人に掌握されるかも知れないという不安の氣持は絶えず存在したであらう。^⑧葛洪もやはり同じような氣持で、現実の新王朝に対する大いなる期待と警戒の氣持を抱くところがあつたであらう。このうち期待・よろこびの氣持は、先にあげたような、新体制への贊美と期待の文として外篇のあちこちに現われている。また西晋王朝下の混乱の苦汁をなめた葛洪にとって、新しい王朝の出現ということはある種の救いでもあつたであらう。そしてある意味では、葛洪自身が政治的な場面への登場という

ことを真剣に考えていたと考えるのも良いし、事実、葛洪の三十台にあたるこの時期から、四十台の初めにかけては、政治的な場である程度の活躍もしたのであろうことが知れる。^④そして、新王朝に対するこの期待に、警戒の気が持がこめられて、ここに逸民・隠者の存在がクローズアップされてくる。即ち、かつては西晋王朝への失望と怒りが、逸民・隠者の存在への賞賛をなさしめたのであったがこんどはそれは逆に動いて、この思想を世状と理想社会との関連から強調していくことによって、新体制への提言・警告の意味を持つものとして作用せしめるに至っている。しかしこれらは後章との関連で考えなければならぬので、ここでは特に、新王室に対する逸民賞揚の直接的意味について考えてみる。

従来、『周易』に、「天地閉、賢人隠、」(文言傳)と言ったり、『論語』に、「賢者避世、」(憲問)とか、「危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱、」(泰伯) と言うように、現実社会の混濁の中に埋没する自己を回復せんとする行為を是とし誉める考え方の流れがあり、また一般に、賢者は乱れた社会から離脱し隠遁するものとされ、隠者

と賢者はしばしば同一視される傾向があったように思われる。これに対して政治的な面からは、良き君主はその補佐として有能な人即ち賢者を見出し起用することが必要であるとする見方があり、これは、古来有名な為政者には必ず有能な在野の賢者を見出す説話があるのを見てもわかるとうりであるし、『毛詩』にも、「得賢則能爲邦家立太平之基矣、」(小雅・南山有台)と云い、『禮記』でも、「季春之月、聘名士、禮賢者、」(月令)とあるのをはじめとして、賢者を尊ぶことを述べる表現は多数見受けられる。一例にすぎないが、『漢書』の王褒伝(列伝三十四下)に、「聖主得賢臣頌、」が見えるのなどもこうした政治思想の流れを背景とするものであろう。

葛洪が逸民を賛美するのは、逸民が賢者であること。有能な補佐であり得る者という意味も持っていることは後述に明らかになっていくであろうが、有能な為政者は賢者を登用することが必要であることを述べて、

無良輔而羨隆平者、未聞其有成也、……故招賢用才者
人主之要務也、(貴賢)

と云い、また何故に君主は賢者を登用することが必要な

のかということについては、

人君雖明並日月、神鑿未兆、然萬機不可以獨統、曲碎不可以親總、必假目以遐覽、借耳以廣聽、誠須有司、是康是贊、故聖君莫不根心招賢、以舉才為首務、

(審舉)

の如く、君主の手足となつて、彼のはたらきの機能化をはかるためであるとする。従つていかに君主が多くの可能性を内に持つ人であっても、それを發揮せしめる有能なる補佐なき場合は、

雖有稽古之才、而無宣力之佐、則莫緣凝庶績、(審舉)である。しかる故に君主はなにをにおいても補佐者を見出し登用せねばならないこと、

明君勤於招賢、而汲汲於擢奇、導達凝滯、而嚴防壅蔽、才誠足委、不拘屠釣、言審可施、抽之於戎戍、或舉於牛口之下、而加之於群僚之上、或拔於桎梏之中、而任以社稷之重、故能勲業隆濟、拓境服遠、取威定功、垂統長世也、(名實)

の如くであり、ここには古き世の聖主とうたわれた人々が補佐を得るにいかんにかに尽力したかの故事を引用すること

でそれを示している。^⑤

さてこの補佐としてどのような人物が求められるのか
が問題であるうけれども、勿論それは

道靡遠而不究、言無微而不研、(任命)

に示されるような、優秀な才能の人物でなければならぬのであるから、^⑥それから推される人物としていかなる存在者が目標とされているかは、

良才遠量之士、或披褐而朝隱、或沈倫於窮否、懷道括一、(君道)

高士不能掩其節以同塵於隘俗、(廣譬)

冠世之才能合流俗、(廣譬)

などの文から逆に推してみても、隱遁の士こそがその有力な対象になっていることは論をまたないところであろう。以上が新王朝への提言であるが、論がもとにかえったところで総括的に述べると、君主が優れていることが政治の安定・万民生活安定の条件であり、そのためにいかにして優秀な人物を選ぶかということが君主に荷せられた重大な任である。こうして葛洪は、司馬審の新王朝が成功するかしないかという点で、留意すべきは、どのよ

うにして賢者の協力を得るようにかというこゝとであると暗示しているものと思われる。そうして、このように在野の士を用いることを強調していることから更に考え及ぶことは、王朝建設の主導権を持つ北方人に対して在野の人とは即ち江南土着の人々をさすと考えてよからう。従つてこれは今までの北方人の仲間意識や優越感のみによる閉鎖的な官僚組織になることは極力避けねばならないということでもあるし、江南に王朝が建設されることは江南人の喜びでもあったと同時に、先に述べた様な不安の念も大いにあり、王朝の組織が北方人によって専横されることになつては困るといふ危惧意識の表現でもあったであろう。葛洪の危惧のとうり、実際、北方・南方人の対立も様々なかたちで存在したようである。従つて以上から言えることは、結局、新王朝において大事なことは、江南人を排斥しないこと・補佐をはじめとして優れた人材を選ぶに、従来の北方人としての意識をそのまま流用することは危険であるということまでをも暗示していると云えようである。なおこのことは主として警告に関する内容になるが、これは次章の内容とも深い関

連を持つ。

以上、葛洪が晋王室を賞めることの原因と逸民・賢者を賞めることとの関連について述べて来た。

(三)

前章では社会集団に帰属すべき存在としての逸民賞賛の意味を説いたので、次に政局の不安定な社会機構の中では、真に有能なる資質の士は高次の社会集団に帰属せんとする意志を持っていても、結局逸民たらざるを得ないこと、そしてそこではそのような存り方こそ立派だとする立場を持つ葛洪の考え、またその意味するところを見ることにする。なおここでは西晋末の社会状況との関連で説かれるものを中心にみる。

ある社会である規範が守られるためには、それを守る行為がその人に生命・生活の安全・安定をもたらしなければならぬ。ところで、王朝の存在が弱体化し統制的位置を堅持し得なくなつて、その他の力の存在を許容し、それらが新たな権力者としての座を手中にせんと動きはじめるようになると、礼教を墨守することは、人

に安定を約束し得ないばかりか、かえって身の危険をまねく場合もあるから、このような王朝の下にあっては、王朝権力を維持する理念としての礼教はかえって無視される風となっていく傾向があるであろう。この意味から葛洪は、現実社会^⑨（と言ってもこれは西晋末期の社会の状況をさしていると思われるが）における道德意識の低下をなげき古の聖人の示した礼教の重大さが無視されつつあることを、酒誡・疾謬・譏惑・刺驕篇などを中心に取りあげ、例えば

世故繼有、禮教漸積、敬讓莫崇、傲慢成俗、（疾謬）

の如く述べている。葛洪の言う礼教とは『禮記』などに見られる所謂聖人の教えのことを云っているので、例えば

在禮、男女無行媒、不相見、不雜坐、不通問、不同衣物、不得親授、姉妹出適而反、兄弟不共席而坐、外言不入、内言不出、婦人送迎不出門、行必擁蔽其面、道

路男由左女由右、……夫婦之間、可謂昵矣、而猶男子非疾病、不畫居於内、將終不死婦人之手、況於他乎、など『禮記』に見えるものがあげられて、これこそ男女

の別あるを重んずる聖人の明制であるとされる。これが男女のあるべき姿でなければならないのに、現実の社会では、

而今俗、婦女休其蠶織之業、廢其女紉之務、不績其麻、

市也婆娑、舍中饋之事、修周旋之好、更相從詣、之適

親戚、承星舉火、不已干行、多將侍從暉晔盈路、婢使

吏卒錯雜如市、尋道褻諠、可憎可惡、或宿干他門、或

冒夜而反、游戲佛寺、觀視漁畋、登高臨水、（疾謬）

の如く、特にその婦徳の面での墮落に著しいものがある

ことを指摘している。^⑩ これらをはじめとして、世人の間

に存する反古礼的態度の实例をいくつもあげて、このよ

うな状況がおこらないように、真正にして強力な君臣体

制の確立を望むことを示す一方、実はそのようであり得

ない状況への警告を発しているのである。ところで、世

人のこのような態度は、自然と、その弁護のために、

遂詘周而疵孔、謂傲放爲逸世矣、（疾謬）

終日無及義之言、徹夜無箴規之益、誣引老莊、貴於率

任、大行不顧細禮、至人不拘檢括、嘯傲縱逸、謂之體

道、（疾謬）

のように聖人と古礼への批判・排斥へと発展する傾向を持つとともに、古典の中の都合のよい部分のみをひっぱりだして来て、自分達の行動には、あたかも重厚な伝統と思想のうらづけがあるもののように言うけれども、決して彼らの中に人なみ優れた深いものがあるのでないことは、

若問以墳索之微言、思神之情狀、萬物之變化、殊方之奇怪、朝廷宗廟之大禮、郊祀禘祫之儀品、三正四始之原本、陰陽律歷之禘道度、軍國社稷之典式、古今因革之異同、則悅悻自失、喑鳴俛仰、蒙蒙焉、莫莫焉……強張大談曰、雜碎故事、蓋是窮巷章句之士、……所宜識不足以問吾徒也、(疾謬)

によっても明らかであるとし、彼等の行動を支えているものは深い見識ではなく、礼教に反する行為のみが立派なことであり大人物なのだといふ極めて単純な価値観であるにすぎないのであって、この価値観の基底には、

世人聞戴叔鸞阮嗣宗傲俗自放見謂大度、而不量其材力、非傲生之匹、而慕學之、(刺驕)

に見られるように、単に戴良や阮籍がそのような在り方

をしたということ以外にもなく、戴・阮らが実際にはそのような在り方をする土台には、深い見識と才能があったのだということ彼らだからこそできたのだということを考えてみることもしない。このような猿まね行為は流行にのりおくれまいとする軽薄な人間のみがなすことであると云う。西晋末から東晋にかけて、このような在り方が流行していたことは、『世説新語』や『晉書』などにも見えていることである。葛洪にしてみれば、目立つ行為をして世人から注目され慕われるためには、その本人はそれにふさわしい才能と学識を持つことが必要なのだと言いたいのであろう。この立場から、後世、大部分の人からは大人物とうたわれた郭泰も、実は奇をてらう売名主義者でしかなかったと徹底的に批判されている(正郭篇)し、その言動が天才的な才能を根拠としたものであるかの感をいだかせる禰衡も、結局血の気の多い軽薄な若者にすぎなかったのだと批難されているのである。

さて、その行為が浅はかなものであっても、聖人の教えに逆行することから社会を大きな混乱に導くようなも

のに関わってくるから、それはそれなりに強大な力になつていく恐ろしさを具えている。即ちこのような士人階級の在り方は王朝権力の弱さということ、したがって礼教を守ることが身の安全を保証しないということ的背景としてるのであるから、このような行動はたやすく伝播するし更にそれは時の流れの長さ按比例して、次第に批判されることすらなくなつていき、ついには、その社会で特にとりたてる程の在り方でも行動でもないものになつていくのみか、逆にそれが有り得べき又は望ましい在り方や行動として固定化し常識化していく趨勢を具えているからである。それは

然民間行之日久、莫覺其非、(疾謬)

という表現の中によく言いあらわされていよう。このような考え方や在り方が政治の面に逆に影響してくると、

輕薄之人、迹廁高深、交成財賄、名位粗會、便背禮叛教、託云率任、才不逸倫、強為放達、(疾謬)

のように勢力者を中心とするグループと放達行為の結びつきは、厳正な君臣体制治下ではおこり得ない官僚社会の墮落現象を増々顕著にしてゆき、^⑩

世間或有少無清白之操業、長以買官而富貴、(刺驕)
秉斤兩者、或舍銓衡、而任情、掌柯斧者、或曲繩墨於附己、選之者、既不爲官擇人、而求之者、又不自謂不任、(百里)

というような、買官や私情による選官が当然のことのように行なわれ、人間の価値観はあるべきかたちを次第に変容させていく。これらに対して、選官の方法の改善を主張するものが審舉篇にも見え、政治の厳正を力説するものが用刑篇にも見えるのをはじめとして、類似の表現は外篇のいたるところに見られる。現実のこのような勢力者権力の示す価値観が固定化していくことは、一方聖君を助け万民を善導すべき士大夫階級における為政助力者の性格を蝕み無力化し、

生乎世貴之門、居乎熱烈之勢、率多不與驕期而驕自來矣、(刺驕)

君臣体制下の公正な階級制度はなんら意味を持たず、広く人材を起用すべき風は権力者による世襲的閉鎖的な機構を形成していくことになるとしている。このような現象は、

徒以翕扇敎迹、偃伊側立、低眉屈膝、奉附權豪、(刺驕)
或假財色以交權豪、或因時運以佻榮位、或以婚姻而連
貴戚、或弄毀譽以合威柄、(疾諷)
等の文によく述べるところである。

こうして、本来その本質の優劣によるべき選官の規準は外形や財力・權勢に置きかえられるのであるから、社会構成員の行為の規準さらには価値観といったものは、次第に王朝を頂点とするものではなくなくなっていくし、このことがますます社会を混乱のうずき込みに巻き込み、王朝を崩壊させる趨勢を形成していくのである。こういう観点から、本質と外形とは厳密に見分けられねばならないことが名實篇や清鑒篇・行品篇などに特に集中的に説かれている。公正な立場からの賢者の任命に端を発しない王室の弱さ不安定さは、礼教無視から豪族の勢力拡張をもたらし、それが次第次第に王室の存在を有名無実なものにする。そしてそれが更に社会を混乱に導くというような惡循環をくり返させることになるのである。

以上のうちでは言いのこしているが、このような放達行為は、単に王室の力の衰微からのみおこってくるので

はなく、このような行為を尊ぶ社会現象はわざとつくりあげられていく性格も多分にあるというようにも考えねばなるまい。即ち新權力の幹たらんことを望む勢力者が、王室の存在を有名無実にするための積極的な行動の一環として意図的にこのような在り方をひろめてゆく面もある。こうして社会の混乱を深めること、又一方では以下に述べるように、王權の確立に力あるような者達をしめ出してしまふようにすることが仕組まれていくのである。阮籍らの場合はともかく、晋代に行われたこれらの単純な模倣としての放達行為には多分にこの様な意味が存したのではなかったろうか。

さて次に、以上の政治・社会の混乱と逸民・隱者の存在との関連に論を進めていくことにする。反礼教的行為の蔓延が社会を混乱に陥入れ王朝を崩壊に導く、このことを決定的にするものは、これらの社会現象の過程で、なお王朝の建てなおしに力を与え得る賢者が排斥されていくところにある。その排斥はまずどういふかたちで現われるかといえ、

儻類飲會、或臚或蹠、暑夏之月、露首相體、盛務唯在

擣菹強棋、……以如此者爲高遠、以不爾者、爲駭野、

(疾謬)

の如く、はじめは放達をなす人の自衛弁護のための反論者ないしは批判者に対する中傷からはじまり、それを勢力圏を利用して伝播すること、これによって賢者のレツテルを愚者のそれにはり変えることに発展させていくこと、即ち、

凡夫淺識、不辯邪正、謂守道者爲陸沈、以履經者爲知變、(審學)

のように、世論の中で今までは賢者のものとされてきた考え行爲がマイナスの価値評価として定着するようにはたらかかけていくのである。従って、先に述べた古の賢者批判などもこれと軌を一にするものと言えよう。そしてその結果としては、

以嶽峙獨立者爲吝疏拙、以奴顏婢倖者爲曉解當世、

(交際)

以傲兀無檢者爲大度、以惜護節操者爲澀少、(疾謬)

の如く、世論の中にある人間への価値評価が変化していくことがおこってくる。このような世状の中で放達に対

して批判的である人としての賢者は

是以高舉美行抑而不揚、(擢才)

窮士雖知此風俗不足引進、而名勢竝乏、何以整之、每以爲慨、故常獲憎於斯黨、而見謂爲野朴之人、(疾謬)
悲夫、邈俗之士不群之人所以比肩不遇、不可勝計、或抑頓於數澤、或立朝而斥退也、(窮達)

というような在り方として位置づけられてしまう。かくして世状の混乱を示す一現象として、有能の士・賢者が斥けられるという現象がおこってくる。しかし彼らはこのように世俗の価値規準のわく外へ出されながらも、理想的な君臣体制がいつかは確立されるであろうし、優秀な君主が登場してその持つ深い見識でもってさがし出してくれるであろうかとの期待を持って陋巷に在ること、

是以智者藏其器以有待也、隱其身而有爲也、(良規)

の如くである。然し自らが権力者たらんとする者は王朝の力を衰微させることに目標があるのであるから自分達に縁もゆかりもなく、下手をすれば正論でもってこちらを批判する力になるかも知れないこのような正統論者たちをたやすくかびあがらせるわけにはゆかない。だか

ら世論への働きかけと同時に、これを君主からも目のとどかない存在にしなければならぬ。そこで

佞人相汲引而柴正路、俊哲處下位而不見知、(名實)

懷正居貞者填窄乎泥中、而狡猾巧僞者軒翥乎虹霓之際矣、(審舉)

逸倫之士、非禮不動、山峙淵渟、知之者希、馳逐之徒蔽而毀之、故思賢之君、終不知奇才之所在、(審舉)

に示されるようなかたちで賢者たちはその存在をかくされ排斥されていくわけである。

以上、賢者が隠者であらざるを得ないのは自ら望むがためではなく、先ずそうあるようにしむけられる面も存するわけである。しかし一方積極的にそれを求める意志も隠者にはあるのであって、それはこのように世論から斥けられ、勢力者のグループに君主から隔離されるような次の時点の問題として起こってくる。本来積極的に、理想的君臣体制の確立に大いに力あらんと欲するこれら賢者は、

夫賢常少而愚常多、多則比周而匿瑕、少則孤弱而無援、

(名實)

によって、その政治社会への登場ということについての積極性をあらゆるやり方で奪われたのであるから、君主が見出ししてくれるのを消極的に待つ他ないわけであるが、いつまでも消極的に在ることで、屈辱を受けることは、自尊の気持の許さぬところであるし、それ以上にそのように在ることで、大いなる勢力を持ちはじめた反礼教者たちを反対に軽蔑していることは、大いに身の危険に関わってくることである。そこで彼らは世論が自らに敵対し勢力者が自分をしめ出しにかかったと知るや、積極的にその社会に背を向けていく段階に移行するわけである。そのことを語る文としては

姦僞榮顯、則英傑潛逝、高概恥與鬪豈爲伍、清節羞入鑿鑿之貫、舉任竝謬、則群賢括囊、(審舉)

於是明哲色斯而幽遁、高俊括囊而伴愚、(漢過)

當途之士莫舉莫貢、潛側武之陋巷、竄繩樞之蓬屋、

(安貧)

などをあげることができであろう。正当な思考と在り方が逆に作用してかえって不利な環境に追いやられ、一般的価値規準の最低の存在として位置づけられたことに

対するこれら賢者の積極的な反逆は、世俗的価値観への反撥というかたちをとってあらわれることになる。そういう価値観を抱いた生存の仕方、自然と隠者の生存と違ってあらわれてくるわけである。と同時に、これらの文の表面には表われてはいないことなのであるが、世俗の一般人にとっては勢力者たちによってかもし出された反礼教的ムードに従っていくことが保身であるが、賢者にとつては世俗の価値規準の外に在ることが、身の安全を保証することになるのもあることは前述の如く勿論である。なぜなら、自ら欲せずして排斥される段階ではなおプラスの危険性の中にあることになるのであるが、自ら欲して世俗の枠外に出るといふ積極的な在り方に転換することによって、勢力者からは政治的関心を全く失ったものと認められ、危険性はマイナスに変えられていくからである。

(四)

上章においては葛洪の云う隠者の存在者の発生に関する社会的条件にふれ、このような中では賢者は隠者たざざるを得ない存在であることを明らかにしてきたので、ここでは、そのようなものとしての隠者の賛美の意味を総括的に考察してみる。

まず、隠者の存する現象の社会的背景はどうであろうか、上章に述べて来たことを逆にたどっていけばそのことは自から明確にされてくることであり、それを通してこそ隠者賛美の真意のありかも明らかになると云える。今ここにそれをまとめてみると、隠者の存する社会的条件は、王権の弱化、特殊な勢力者グループの一種の政治工作としての道徳・伝統無視の考えまた行為、そしてそのことの一般的風潮化、それと関連する閉鎖的独占的任官制などにあった。従ってここで云えることは、賢者が隠者であらざるを得ず隠者であることを求めるといふような王権社会は非常に大きな崩壊の危機に直面していることになるわけであり、これから更に、心ある為

政者は、よろしくその点に注目してそれへの対策を考えなければならぬという警告の言葉として解さなくてはならない面を持っていると云えるわけである。この警告の言葉としての他の表現は、過去の時代の実例をくり返し述べる文にも見られ、

漢之末年・呉之晚年則不然焉、望冠蓋以選用、任朋黨之華譽、(崇教)

漢之末葉、桓靈之世、柄去帝室、政在姦臣、網漏防潰、風頹教沮、(審舉)

余觀懷愍之世、俗尚驕奢……(刺驕)

漢之末世、則異於茲、蓬髮亂鬢、橫衣不帶或褻衣以接人、(疾謬)

歴覽前載、逮乎近代、道微俗弊、莫劇漢末也、(漢過)

漢之末年、呉之季世、則不然焉、舉士也、必附己者爲前、取人也、必多黨者爲決、(窮達)

など、いずれも社会の混乱・多黨者による権力の専横・風教の墮落などをこういう時期の特色としてあげている。¹⁵⁾従ってこれらはいずれも、賢者が退けられ、世俗の混濁に背を向けて在る隠者が誕生する条件を完全に具え

ているわけである。そして現実(といってもこれは前述のように西晋末をさすと考えられる)の社会はそれと同じ状況を呈しているが故に、賢者は隠者たらざるを得ないわけであり、このことから為政者に望まれることは隠者・逸民が存在するほど危機がせまっていることを十分悟って、積極的に有能の士を見出す行動を開始しなければならぬわけであるが、一旦この様な状況がおこってあれば既に専横の勢力者達の力は想像以上に大きくなっているから、君主が思うさまに賢者を見出すこととはいいよいよ困難である。そしてそのような状況をかかえていた漢・呉さらには西晋王朝は滅んだわけである。(これらについて、君主の愚を直接には云ってはいないが、聖君は賢者を見出すということから逆推して、そのことを暗に云っているわけである。)これらを良き教訓とすることが新政権の王者に与えられた課題でもある。以上要するに、西晋の政権の乱れをとりあげることで、賢者はこういう世状下では隠者たらざるを得ない状況に追い込まれてしまう運命にあり、そしてそうであるからこそ、こういう社会を背景としては隠者的な在り方は賛

美されるに十分な良い在り方であった。というように論ずることから、結局、隱者は社会混乱から王朝の危機というものを表わす一つの象徴でもあるのだと云いたいのであって、これが、このようにならぬよう十分配慮せよとの新政権への提言・警告のうちの一と云える。その二は(2)において主として述べた内容に関わるのであるが、賢者は隱者たらざるを得なかつた西晋王朝に代わる新政権に必要なことは、これら在野の士たる隱者を、王者が優れた補佐を必要とするという伝統的な政治観に立って、重用すべきである。隱者をそのままにしておくということは政権の安定をなし得ないし、隱者が在るということは、新興とは名ばかりの王権の弱さ・社会の混乱を露呈してしまうことになる。と云うものの如くである。隱者贊美の真意はこの二つの内容を持っていたものと思われる。

従来隱者は世俗社会と断絶して在る存在者という面のみが注目されやすいが、その社会状況との関連を考え、その発生の過程から見ると、意外にもまったく反対で、本来は積極的に社会に参加する意志を持っている存在者

であったことがわかるのであって、そのような存在である隱者を贊美する思想表現の中には、その社会における権力体系が崩壊することへの警告の意味が含まれていることには興味深いものがある。ただ葛洪の場合には、更にそれが新興政権への提言という形で用いられているところに、その特異性があるように思う。

註① 哲学第18集「葛洪の逸民」

② 哲学第21集「鮑敬言の思想」

③ 『晉書』王導伝に、「及徒鎮建康、吳人不附、居月餘、士庶莫有至者、導患之」と見え、江南新政権もその確立には可成り苦労している。江南の名族顧榮・賀循らをまねくことよってはじめて安定したという。即ち「帝乃使導躬造循榮二人、皆應命而至、由是吳會風靡、百姓歸心焉」と言う。これらがよく語るところである。

④ 卷五十の「自叙」や『晉書』本伝によれば、三十台の初とおぼしき時期に司馬睿の府に掾となっているし、四十台には王導に召されたりしたことが『晉書』の本伝や『太平寰宇記』卷一百六十などに見えている。

⑤ 昔在、唐虞稽古欽明、猶俟群后之翼亮、用臻巍巍之成功……喻之元首、方之股肱、雖有尊卑之殊邈、實若一體之相頼也、

使親疎相持、尾爲身幹、枝雖茂而無傷本之憂、流雖盛而無

背源之勢、(君道)

以英逸而遭大明、則桑蔭未移而金蘭之協已固矣、(接疏)

唐虞所以能臻巍巍之功者、實賴股肱之良也、(審舉)

雖有稽古之才、而無宣力之佐、則莫緣凝庶績、(審舉)

故招賢用才者、人主之要務也、(貴賢)

是以明主、……不遠千里、不憚屈己、不恥卑辭、而以致賢

爲首務、得士爲重寶、(欽士)

などの文がこれをよくのべている。

⑥ 哲学第18集頁124～125参照。

⑦ 『晉書』卷五十八の周勰伝に、「時中國亡官失守之士、避

亂來者、多居顯位、駕御吳人、吳人頗怨、勰因之欲起兵」と

見え、江南の人々の北方人に対する対立意識の相当強いもの

のうかがえる。『北堂書鈔』卷六十三都護の項に、「晉中

興書吳郡顧録云、榮字彦先、……時南士多士、未盡才用、

榮又上言……」と見え、江南人がともすれば政権の圏外に

置かれやすい存在であったことを示している。これは『晉

書』卷六十八の本伝にも見えている。また北方人が江南で

ある種の異和感をいだいていたことは『晉書』卷六十五の

王導伝に、「過江人士、每至暇日、相要出新亭飲宴、周顛中

坐而歎曰、風景不殊、舉目有江河之異、皆相視流涕、惟導

慨然變色曰、當共勦力王室、剋復神州、何至作楚囚相對泣

邪」と言う。これは直接の対立を言う文ではないが、北方

人が北方人としてのこのような誇りと同胞意識を持つことが

が江南人との対立の原動力になっていたことは言えよう。

なお略同じ文が『世説新語』言語篇にも見える。

⑧ 阮籍らに見られた反礼教的態度の中にもこれに近いもの

があらうし、西晋から東晋へかけてこの風を慕う行為があ

ったのもこれに原因があるろう。

⑨ 現実という場合、葛洪には二重の意味があったと思う。

一は実際に苦酸をなめた西晋末混乱の社会で、この章と深

い関連を持つもの。一は司馬睿新政権の確立をむかえた時

点で、前章は特にこれとの関連が深い。このことは、『抱

朴子』が一時に書きあげられたものでなく、西晋末期を背

景として書きためられ、東晋初期に完成されたことから

推測し得ることである。

⑩ 『文選』卷四十九の「晉紀總論」に、「其婦女莊櫛織紵、

皆取成於婢僕、未嘗知女工絲枲之業、中饋酒食之事也、

……」と言う。

⑪ 『晉書』卷四十三王衍伝によると、「(王衍)常自比子貢

兼名聲藉甚傾動當世、妙善文言、唯談老莊爲事、……義理

有所不安、隨即改更、世號口中雌黃、朝野翕然、謂之一世

龍門矣、累居顯職、後進之士、莫不景慕放效、選舉登朝、

皆以爲稱首、矜高浮誕、遂成風俗焉」と見え、このあたり

の葛洪の述べることに一致するものがうかがえる。

⑫ 前注とも関連があるが、『文選』卷四十九の「晉紀總論」

に、「風俗淫僻、恥尚失所、學者以莊老爲宗、而黜六經、談

者以虛薄爲辯、而踐名儉、行身者以放濁爲通、而狹節信、

進仕者以苟得爲貴、而鄙居正、當官者以望空爲高、而笑勤

恪……」と言い、注所引の『王隱晉書』に、「王衍不治經史、唯以莊老虛談惑衆」と言い、又「貴遊子弟、多祖述於阮籍、同禽獸爲通」又「傳玄曰、論經禮者謂之俗生、說法理者名爲俗吏」と言う。『世說新語』德行篇には、「王平子胡母彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸體」とあり『王隱晉書』を引いて阮瞻王澄・謝鯤・胡母輔之らが阮籍をまねたことを言っている。なお『晉書』卷四十九に四友・八伯・四伯などのことを記している。これらに対しては裴頠の崇有論が鋭い論難を下している。『晉書』卷三十五の本伝には「頠深患時俗放蕩不尊儒術、何晏阮籍素有高名於世、口談浮處、不遵禮法、尺祿耽寵、仕不事事、至王衍之徒、聲譽太盛、位高勢重、不以物務、自嬰遂相放效、風教陵遲」と見える。また卷九十四の戴逵伝によれば、彼にも放達非道の論があり、「若元康之人可謂好遯跡而不求其本、……放達似達、所以亂道、然竹林之爲放、有疾而爲矧者也、元康之爲放、無德而折巾者也」と言う。

⑬ 『文選』の「晉紀總論」にも、「而世族貴戚之子弟、陵邁超越、不抱資次、悠悠風塵、皆奔競之士」とあり、注所引の劉寔の「崇讓論」には「非勢家之子、率多因資次而進之、」と言う。なお前注⑩も参照。

⑭ 前注⑫を参照。

⑮ この他に、

靈獻之世、閹官用事、群姦秉權、(審舉)
漢末之世、靈獻之時、品藻乖濫、(名實)

漢末諸無行、自相品藻次第、羣驕慢傲、(刺驕)
などがあり、呉失籍の内容などもこれにあたる。

(福岡女子短期大学)

The Real Intention of the Admiration of Hermits

Takao Shimomi

Kê Hung (葛洪), a scholar early in the 4th century A. D., wrote his 'Pao pu tzu' (抱朴子) and explained his famous Immortal being in its *Nei pien* (內編), while he admired the way of hermit life in its *Wai pien* (外編).

In this paper, the auther of these lines focused his eyes mainly on the *Wai pien* and tried to make it clear where lies the real intention of *Kê Hung's* admiration of such kind of existence as hermits. Although the admiration of hermit itself might be understood merely as a manifestation of the ideal figure of human existence, it is, in reality, dealt as the symbolic expression of a certain social phenomenon.

That is to say, *Kê Hung* tried to explain that hermits would appear with such backgrounds as the weakening of the dynastical authority and the confusion and instability of the political administration. Therefore, the admiration of hermit-like existence could conversely be taken as the tacit implication of the social confusion and of the crisis of its collapse.